

<書評 2 >

福井康貴

『歴史のなかの大卒労働市場——就職・採用の経済社会学』

(勁草書房, 2016年)

相澤 真一

(中京大学現代社会学部准教授)

本書評では、堀氏の第1書評を受けて、経済社会学を標榜する観点から全体にかかわる2点の論点を提示する。

第1に、実証的記述と「大卒労働市場の見取り図」(1頁)に関する論点である。本書は、その狙いとして、「本書は、大卒労働市場の歴史を、企業・学生の相互行為とその制約に焦点をあてて記述することで、大卒労働市場の見取り図を得ようとする試みである。」(1頁)とするものであったものの、「見取り図」を得られた感じとは違う印象を得た。

先述の概要でも示したように、著者自身が大卒労働市場の構成が「章タイトル」にも示されるように、人物試験、学歴、面接などがトピックとして挙げられることは理解できるし、タイミングが重要な構成要素だったことも理解できる。しかしながら、通読した印象では、大卒労働市場の構成要素についての歴史的事象を読み、知ることができた、という印象にとどまった。経済社会学として、市場の交換関係を描き出そうとするならば、構成要素の歴史的析出を踏まえて、構成要素のパターンの変化こそが、描かれるべきであったのではなかろうか、とも考えられるが、これは、著者の今後の研究に期待すべきことなのだろうか。

なお、この点に付随して、堀書評の第1の論点とも関連するが、市場が出来る上がるという経済事象は、社会学としてどのように説明することができるのか、ぜひ伺いたい。例えば、社会学と歴史の両者に精通する著者には釈迦に説法であることは十分承知しているが、社会学による歴史研究は、新しい社会関係を析出するということにしばしば知見を見出すことが多いため、ともすれば、XXの誕生というように、「誕生パラダイム」に陥りやすい。評者としては、そのような「誕生」を描き出す研究も社会学としては有意義

であると考えているものの、経済社会学を標榜する著者にとって、今回の大卒労働市場の歴史的展開というトピックでは、このような「誕生パラダイム」とどういった距離感を持って叙述を展開しようとしたのか、もし意図していたところがあれば、ぜひ伺いたい。

この論点を継続させた質問だが、重要な先行研究として、竹内洋が本文中で上がっている(7頁)。この点は、教育社会学を研究する者として納得できると同時に違和感を覚える。竹内洋の歴史叙述は、著者も気づいているように、一貫して教育社会学および教育、学歴の観点から構成されている。むしろ市場の営みについては、そう読み取るのではなく、当事者の解釈のレベルと当事者の解釈を解釈する観察者の二重の解釈学が存在することを著者は指摘する(8頁)。これが、社会理論としては、バーガーやルックマンを背景としたものであることは理解できるものの、それを実証的な記述にするという点で、目指すべき実証の姿がなかなかイメージすることができなかった。以上の論点と合わせて、もし目指していた(そして今後目指していく)実証のあり方や交換関係の描き方などの具体的なイメージがあったら伺いたいと感じた。

第2に、本書が「歴史のなかの大卒労働市場」というタイトルを掲げることもあり、近代日本をどう記述するかという観点から論点を提示したい。本書における実証が最も有効に機能していると考えるのは第4章である。すなわち、第4章では、他国ではあまり見られない「間断なき移行」を規定する「タイミングを制約する」という大卒労働市場の性質が、どのように生じたり、変容したりしているかを論じており、またそこで従来の経済社会学における実証と関連付けながら、124頁に示すような図で、市場におけるルール制定の仕方について明らかにできていると、考えられるからである。

この点とは対照的に、第4章以外の大卒労働市場の性格は、近現代日本というフィールドをうまく生かし切れているように感じなかった点もある。例えば、面接の重視や学歴の重視といった点は、多くの国の大卒労働市場に見られるものである。その点で、大卒労働市場の歴史的形成という海外の経済社会学・歴史社会学の研究からすれば、本書はどこが一步抜け出ようとしたものになったのか、もう少し意義を伺いたいと感じた。

また、第1章、第2章の戦前の話題は、大変貴重であった一方で、2点、疑問に思ったことがある。それは第1に、企業体も同時期に立ち上がるなか

で、企業体が採用姿勢を作り上げる過程についての資料がいささか不足しているように感じた。例えば、戦後や現在であれば文書や現在ではインターネットのプラットフォームなどを通じて理解することのできる企業の人材需要についての市場の見取り図が、戦前については、いつ、どのように成立したのかについての情報を十分に把握できなかった。このような市場の交換関係、とりわけ需要に関する情報は、第3章の学歴に関する分析で、学歴取得者への需要がどのようにあったのか、という形でもう少し記述することが可能であったように見えるのだが、それは、資料の制約上、難しかったのであろうか。

第2に、このような諸要素の形成が同時期に進行した近代化こそ、おそらく歴史のなかで大卒労働市場の形成過程を扱う「うまみ」であると感じるのだが、その「うまみ」となりえそうな点を生かし切れていないように感じた。今後の課題としてでも良いので、考えている点があれば、ぜひお聞きしたい。

なお、この第2点目に関連することとして、近代日本の特殊性と一般性について伺いたい。まず、学歴（学校歴）という表現が本文中にあるが（例えば、p.80、図表3-10）、むしろ「学歴（学校歴）」において、学歴ではなく、学校歴に重点を置くという認識自体が、学歴を重視する多くの社会移動の先行研究との差異化の上でも重要なポイントのように感じる。第3章で論じた学校推薦の位置づけと合わせて、このような表現を用いることにどのような意図があったのかを伺いたい。また、第1章では、成績から人物試験に評価の力点に変化していく過程が描かれている。大学の成績を気にせず、自身の面接を重視する日本の採用姿勢は、近代日本に自生的に内生したものと考えてよいのだろうか。それとも、他の社会で参照となるものがあったのだろうか。

質問ばかりを書き連ねたものの、社会学が経済学の植民地にならないためにも、著者のように、経済社会学として、経済学からは読み取れない経済関係の意味を読み解く社会学は、絶対に必要な研究であると考えている。氏の研究は日本ではその最先端にいる。今後の研究を大いに期待している。